

2021年1月24日(日)

老球の細道588号

偉大なコーチ山崎先生の思い出〈PART15〉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

このシリーズはコーチ山崎先生の凄さを知らせる目的で書き始めたのだが、いつのまにか会津高校バスケットボール部のアメリカ遠征記になってしまった。ここで一度軌道修正してコーチ山崎先生の話に戻りたい。

先生がアメリカにおいていかに高く評価されていたか。取材に来ていた地元新聞に記載されていた内容を紹介したい。新聞記事の見出しは『バスケットボールの情熱が遠く広く駆ける』である。この記事は実に3ページにもわたって書かれたものであった。アメリカ、特にバスケットボールの聖地インディアナならではの関心の高さである。主な個所をピックアップする(山崎先生と一緒に同行した中学校コーチで英語教諭の訳)。

【日本のコーチと選手たちが Aces (エバンズビル大学の愛称) のキャンプで練習や試合をする。56歳(当時)の山崎は、アメリカでもっともバスケットボールに対して熱心なインディアナの人々を感銘させるほど、バスケットボールに対する情熱に溢れている。コーチ山崎はしばしば、初めて会ったインタビュアーの私に説明する時でさえも、要点を示すために立ち上がって話したり、また大きなジェスチャーで言わんとすることを伝えようとする。だから、彼の話すことばが日本語であっても、彼のバスケットボールに対する情熱は記者の私に十分伝わってくる。

コーチ山崎は長崎の鶴鳴女子高校を日本のナショナルチャンピオンに2度導いてきた。彼は、今週エバンズビル大学のカーソン・センターで行われるチームキャンプの一員として日本からやってきた。「帰りたくないよ」「できることならここにいたいよ」コーチ山崎はこう言う。彼は、バスケット狂ばかりのインディアナと完全にマッチしているようだ。これは彼にとって初めてのエバンズビル訪問なのだが、この旅はコーチ山崎にとって何かしら故郷に帰るような感じなのだ。

彼は今、エバンズビル大学のヘッドコーチ、キャシー・ベネットと一緒に活動している。彼は、彼女がウイソコンシン大学オシュコシュ校のコーチをしていた頃、1995年のクリニックで出会った。「彼のゲームはすばらしいパッシングゲームをするわよ」(付記:鶴鳴モーションというオフenseでボールと人の動きが止まらず流れるような芸術的なオフenseだったと私は記憶している)「攻防の素早い変化の中で、彼女たちがひとたび優位に立ったら絶対にミスすることなく、確実にチャンスをもものにするわよ。見ていて美しいわ」とコーチ・ベネットはこう言った。

コーチ・ベネット(35歳)はほとんど日本語を話せないが、言葉が通じないことや年齢差にもかかわらず、この二人はすぐさま親しい友達になった。二人が似ている点に気づくことは簡単だ。「気合が入ると立ち上がる」「要点を示す時は両手を広げて説明する」。コーチ・ベネットは「バスケットボールは私たちの心の中を占領しているの」と言った】(続く)